

## 『闇よ、名乗れ』

天瀬裕康著

「医家藝術」誌（文芸特集号）に連載（平成16年～19年）されていた長編「闇よ、名乗れ」が完結し上梓された。これは作家・天瀬裕康のライフワークともいふべき作品である。

構成は第一章「霧と呻きと閃光」から第二章「炎と肉片の意識」、第三章「不信と惑いの世界で」、第四章の「明日は夜が明けるか」までの本編に、ダンテ、甘草四郎、ヘルダーリンなど三者の挿話を組み合わせるという、かなり複雑な形をとつていて、主人公の楠名山彦の時空を超えた彷徨、あるいはその内面への歴程が克明に描き出されている。

天瀬裕康は創作の他に、レーゼドラマや評伝に秀れた業績を残しているが、ヨーロッパ中世を舞台にした、いわゆるゴ

シック文学の範疇に入る作品も発表していることは、あまり知られていない。

今回の「闇よ、名乗れ」には、その中

世紀の該博な知識が随所に現われており、同時にまた、明治維新の開

戦争体験、ことにヒロシマ、ナガサキの被爆の爪跡。さらには長いキリシタン弾圧が残した傷痕など、我が民族が抱えているさまざまなトラウマは、まだ決して解消されていないが、過去の苛酷な記憶から、ともすれば目をそむけ

がちな我々と異なり、作者はあくまで真摯な視線を向け続けていて、一步も退こうとはしていない。その情熱と意念力には、まことに感服せざるを得ない。



評 山田遼

欧米文化の奔流に翻弄された  
アイデンティティの苦悩を活写

国以来

洪水のように流れこ

のである。

(近代文芸社・2000円+税)

会員の著作を紹介する欄です。近著を事務局まで送ってください。

んできた西欧文化、あるいは昭和の敗戦を転機に、いや応なしに押し付けられたアメリカナイズなどによって、引き裂かれ翻弄され、いまだにその大波の水面下で、もがき続いている我々日本人のアイ